

軍馬たちの受難の時代

明治後期に始まった国の政策で、馬たちは「生きた兵器」として戦場へ。十勝からも多くの馬が出征し、悲しい末路を辿りました。

軍馬の里になった十勝

国を挙げて大型馬を生産

大きな馬が珍重されるようになったのは、農耕のためだけではありませんでした。明治の幕開けとともに世界の荒波の中を泳ぎ出した日本は、諸外国との力の差を知らされることとなります。そのひとつが「生きた兵器」である軍馬の資質の違いでした。

縦横無尽に戦地を駆ける騎兵隊や、重い大砲をもとせずにひく大型馬。よく調教され体格のいい西洋の馬に比べ、日本の馬はあまりに見劣りしていました。去勢もされていなかったため、発情期になると手がつけられなくなる始末でした。明治三十三年に中国で北清事変が起きると、日本軍も欧米の連合軍の一員に加わりまし

が、この時、連合軍の兵士は「日本軍は、馬のような形をした猛獣を連れてきている」という言葉を残しています。

さらに明治三十七年には日露戦争が勃発。ロシアが誇るコサック騎兵を目の当たりにした日本は、それ以降、国を挙げて軍馬の改良と生産を進めることとなります。明治三十九年、第一次馬政計画が始まると、国は全国八カ所に軍馬補充部を設置。北海道では上川、釧路、根室、そして十勝に支部が開かれました。十勝支部が置かれたのは現在の本別町仙美里を中心とした約二万ヘクタールもの広大な地。明治四十三年に釧路支部足寄太出張所として開かれ、十勝支部に昇格したのは大正十四年のことでした。



民間の馬も「お国のために」と戦場へ。愛馬との別れを惜しんで撮影した同様の記念写真が各地に残る。

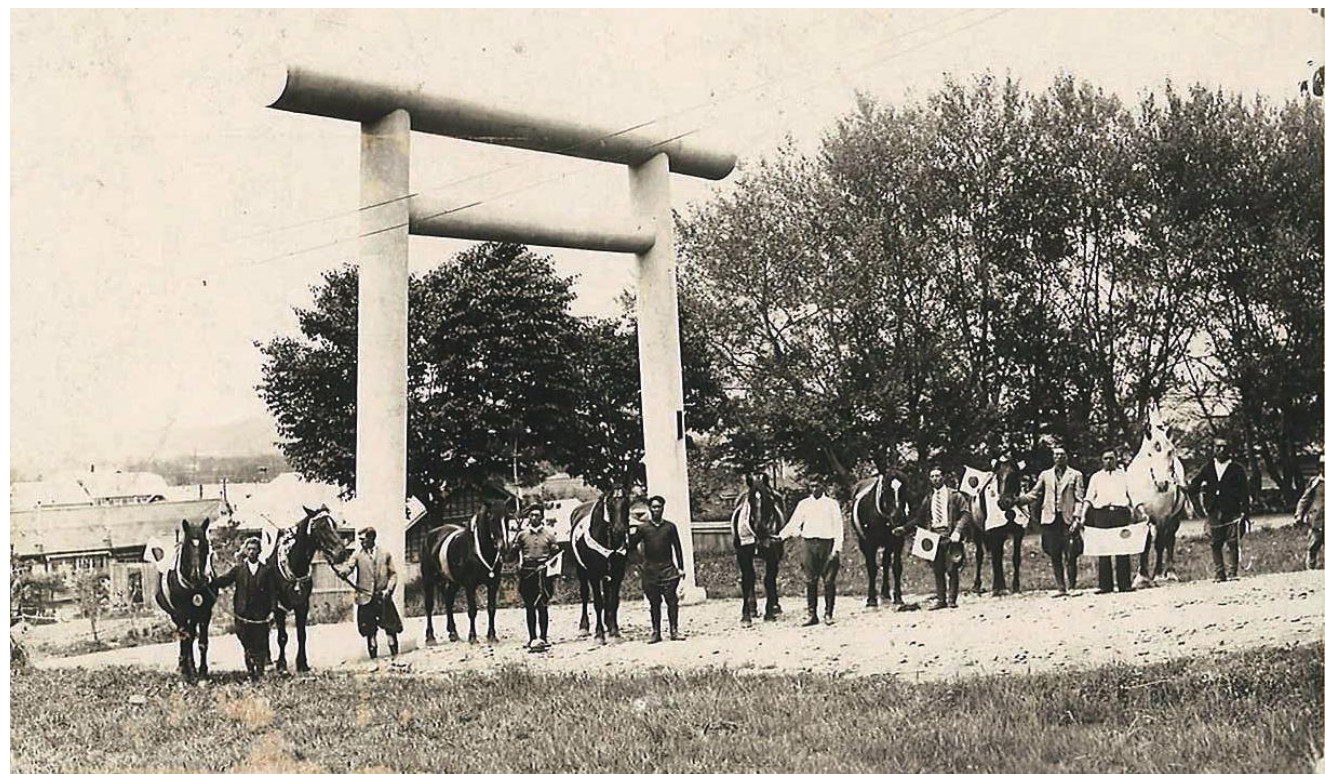


仙美里駅から軍馬を送り出した経験をもつ森弘さん。手にしているのは、馬たちのひづめの跡が生々しく残る馬踏板。(写真/いずれも本別町歴史民俗資料館提供)

仙美里駅は戦場の入口に

軍馬補充部の任務は軍馬の購買、育成、補充でした。昭和十二年に日中戦争が始まると、軍馬の需要は一気に高まります。軍馬補充部には、馬市で「軍馬御用！」の掛け声とともにせり落とされた二歳馬たちが集められて来ました。馬たちはここで五歳まで育てられ、軍の即戦力となるように調教された後、各部隊へと送られて行ったのです。

十勝支部の馬たちは、今は廃線となった旧国鉄仙美里駅から貨物列車に乗せられ、九州の港を経て大陸へと渡って行きました。旧国



出征を前にして本別神社に集う軍馬たち。

鉄職員の森弘さん（故人）によれば、勤のいい馬たちはホームと貨車の間に渡した馬踏板ばふみいたの上で足を踏ん張り、いななきを上げて乗るのを嫌がったと言います。

出征したのは軍馬補充部の馬だけではありませんでした。戦争が激化するにつれて、農家の馬も軍馬として買い上げられるようになりました。当時、馬一頭の値段は五十〜六十円でしたが、軍馬として買い上げられると、二百五十〜三百円もの高値がついたのです。お国のため、戦時中の苦しい暮らしを支えるためにと、農家の人々は泣く泣く愛馬を手放したのです。

馬たちは「武運長久」「一死報国」と書かれたたすきや日の丸の旗を掛けられ、神社で祈願を行った後、家族や地域の人々に見送られて出征して行きました。こうして「生きた兵器」として戦地に送り出された馬は、全国で七十万頭から百万頭に上りました。高額で買い上げられた軍馬は兵士よりも大切に扱われていたが、過酷な戦場で待ち受けていたのは、悲惨な最期でした。戦地から無事に戻った馬は、ほとんどいなかったと伝えられています。

英雄「バロン西」の本別時代

馬術の天才、自ら軍馬育成を指導

昭和七年のロサンゼルス・オリンピックで愛馬ウラヌスを駆り、馬術大障害飛越競技で金メダルを獲得した「バロン西」こと西竹一。男爵（バロン）の称号を持ち陸軍の騎兵将校だった西は、昭和十四年から一年余り、軍馬補充部十勝支部に配属されていました。華族であり金メダリストでもある国民的英雄を迎えるに当たり、十勝支部は急ぎ、西専用の官舎



軍馬補充部十勝支部の専用官舎前に立つバロン西。(写真/本別町歴史民俗資料館提供)



ウラヌスのたてがみ。

や乗馬練習場を用意しました。専任のコックや馬丁を従え、特注の軍服とエルメスのブーツに身を固めた西は、ダンディーな身なりとは裏腹に気さくで豪放な性格。育成中の馬が熊に襲われた時には熊狩りの先頭に立ち、射止めた熊とともに収まった写真を家族に送っています。馬を知り尽くしていた西の任務は、馬の育成指導でした。生産者には、愛馬精神を持って飼育に当たるよう呼びかけ、農閑期における馬の管理、とりわけ栄養状態と

ひづめの保護に注意を促したそうです。昭和二十年、西は硫黄島の戦いで戦死。東京世田谷の馬事公苑で余生を過ごしていた愛馬ウラヌスも、一週間後、まるで西の後を追うように息を引き取りました。西が肌身離さず持っていたウラヌスのたてがみは、現在、本別町歴史民俗資料館に収められています。これは、戦地からアメリカに持ち帰られた戦争遺品のひとつとして、後年、米側から返還され、遺族を通じて西ゆかりの本別町に寄贈されたものです。

本別町歴史民俗資料館

本別町の歴史を伝える同資料館の一角には、全国でも珍しい戦没軍馬遺産コーナーが設けられています。軍馬補充部十勝支部にまつわる資料やバロン西の遺品、出征する軍馬の写真、「馬は兵器だ」と書かれた馬政局のポスターなどが集められ、生きた兵器として戦場に散った無数の馬たちの悲しい歴史を今に伝えています。



住所：本別町北2丁目 電話：0156-22-2141
開館時間：9時～17時（土曜～15時）
休館日：日・月曜、祝日、年末年始
*開館時間や休館日は企画展などにより変更あり。

人に尽くした馬たちの冥福を祈る

今尚、親しみを込めて信仰される「馬頭さん」

路傍にひっそりと立つ馬頭観音（馬頭観世音菩薩）、通称「馬頭さん」。三面の顔と八本の腕を持ち、頭の上に馬の顔を載せたこの像、元は仏教の信仰対象のひとつであり、怒りの形相で諸悪を粉碎する菩薩とされています。それが、日本では江戸時代以降、人のために尽くした馬たちの霊を弔う民間信仰となって広まりました。

開拓時代から馬が家族同様に大切にされてきた十勝には、約五百体もの馬頭観音があり、その数は北海道内で最も多いと言われています。農耕馬の安全祈願のため、命を落とした馬の霊を慰めるため、あるいは戦地に赴く馬の無事を祈るため、人々はさまざまな思いを込めて、供え物を捧げ、お参りしてきました。馬を飼う家がほとんどなくなった今でも馬頭観音は「馬頭さん」と呼ばれて親しまれ、農村部では毎年、地域の人々が集まり馬頭祭を開



道内には古くから馬頭観音にお参りする風習が伝わる。(写真/荘田喜興志)



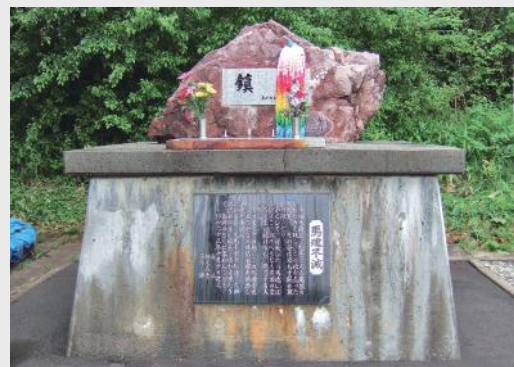
帯広競馬場の馬頭観音前で催される「愛馬感謝の集い」。(写真/NPO法人とかち馬文化を支える会)

く習わしが受け継がれています。帯広競馬場のきゆう舎地区にも、幾つもの観音像を納めた馬頭観音堂が設けられています。毎年八月のお盆前後には「愛馬感謝の集い」（NPO法人とかち馬文化を支える会主催）が開かれ、関係者が、これまでばんえいに貢献してきた馬たちへの感謝の念を新たにしています。

軍馬の魂を弔う慰霊碑

一方、軍馬補充部十勝支部が置かれた本別町の美里別にあるのが軍馬慰霊碑。同碑は前述の元

国鉄職員・森弘さんが、終戦後、仙美里駅でひづめの跡がついた馬踏板を見つけたのを機に、昭和六十三年に私財を投じて建立したものです。嫌がる馬たちを貨車に乗せて戦場に送り出す作業を担った森さんは、異国の地に散った軍馬の魂が、ふるさとの地で安らかに永眠することを願って、この碑を建てました。馬たちの無念を伝える馬踏板を祀ったこの碑は、馬たちの犠牲を後世に伝えると同時に、守るべき平和の大切さも訴えかけています。



美里別の家畜共進会場の横にひっそりと立つ軍馬慰霊碑。(写真/本別町歴史民俗資料館提供)